

## 「闇」の奥

宮崎 孝一

僕は、何か抽象的な概念を以って小説を書き始めるんじやなくて、はっきりしたイメジによって始めるんだ。で、その表現が真実ならば、いささかの効果が生れるというわけだ。

——コンラド

### 一

「闇の奥」(*Heart of Darkness*, 1899) は、コンラド(Joseph Conrad, 1857—1924)の多くの作品の例に漏れず、なかなか分りにくい小説である。

この小説が、作者自身の体験に基づいて書かれたものであることは既に諸家によって指摘された所であり、それはコンラドが一八九〇年にベルギーの開拓会社雇われてコンゴ―河を溯航した時の手記(*The Congo Diary*)と、この小説とを比較して見ても明らかである。(但しコンラドはこの小説の執筆中、日記を傍らに置いて参照したわけではなく、全

く記憶に基づいて書いたものだという。) (一) この旅行中の経験が如何に強烈であつたかは、コンラドが友人ガーネット(Edward Garnett)に語つたという次の言葉からも想像されよう。

「コンゴ―河へ行く迄の俺は人間じゃなかった」("Before the Congo I was just a mere animal") (二)

コンラドが先ず驚かされたのは、開拓という名前によって欧州で想像されるものと、アフリカで実際に行われている仕事との間の乖離であつたと思われる。

この物語の語り手マロー(Marlow)が、「白く塗られた墓が聯想される大都市」パリにある開拓会社を訪れると、受付にいた二人の女は黒い毛糸の編物をしている。「まるで温かい棺衣にでもするつもりか、一心に黒い編物をしながら『暗黒の門』を守っている……」また、この会社でマローを診察した医者は、出稼ぎに行く人間の頭蓋骨を「科学的興

味」から必らず測ることにしていると言い、あちらへ行くと「頭の中身に変化が起るんだ」と言つて、まるで「おだやかな冗談」のように笑う。「温かい」棺衣や「おだやかな」冗談が、冷たい棺衣や、ひどい冗談よりも、更に更に激しい世界を象徴していることは、物語を読み進めるにつれて明らかになって来る。

マローの乗ったフランス船は、アフリカ西洋岸に沿って航行するうち、ジャングルに向つて砲撃している軍艦に出会う。

そこは一軒の家も見えず、軍艦はジャングルに向つてしきりに大砲を打ちこんでいるのだ。またしてもフランス軍が、どこか近辺で戦争をはじめていたらしい。軍艦旗は、ぼろのようにだらりと垂れ、低い船腹からは、長い六インチ砲の砲身がズバリと顔を並べている。ねっとりした、油のようなうねりに、艦は物倦げに揺れ動き、そのたびに細いマストが烈しく傾いた。陸、空、海、陸、海もなく展がる虚しい天地の間に、どうしたというのだろう、ひたすら大陸を目掛けて射ち込んでいるのだ。パン、六インチ砲の一つが鳴る。小さな焰が閃いては消え、やがて小さな白煙が消える。そして可愛らしい弾丸が、微かな唸りを残して飛んで行く、——だが、ただそれっきりなんにも起らない。起るはずがないのだ。見ていると、なにか悲しい道化芝居でも見るような、一種狂気じみたものさえ感じられてくる。誰か一人傍にいた男が、

見えないが、どこかあの向うに土人——なんと、彼は敵という言葉を使つたが——のキャンプがあるのだと、熱心に教えてくれたが、それでも僕には、どうしてもこの氣持が消えなかった。

「悲しい道化芝居」を想わせる「狂気じみたもの」は、マローが上陸して会社の出張所の方へ進んで行く途中で更に見せつけられる。草原には、車輪の一つとれたトロッコがひっくりかえつたまま、「動物の死骸のように捨てられ」ている。ハッパの音が聞えるが、断崖から煙が上るだけで、巖の表面にはなんの変化も現われない。ただ、無目的なハッパかけなのだ。やがて森蔭に達すると、そこは文字通り死の森であつた。

見ると木々の間に、なにか黒い人影が、あるいは蹲りあるいは寝そべり、さては幹に倚り、地に匍いずり、仄暗い光の中に、あるものはくつきりと、あるものは半ば影のように、浮き出している。しかもそれは、明らかに苦痛と自棄と絶望との姿態なのだ。またしても断崖からハッパが轟いて、足下の地面がかすかに震えた。仕事はつづいている。仕事だ！そしてこの森こそは、彼等助力者たちが静かに身を退いて、死を待つところだつたのだ。

じりじりと死を待っているのだ。——一目見てわかつた。敵でもない、囚人でもない、もはやこの世のものであるがなかつた——ただ病苦と飢餓との黒い影、それが仄暗

いこの森蔭に、離然と転がっているのだ。表面はとにかく年期契約という合法手段で、海岸のあらゆる僻陬から連れて来られ、不健康な環境、慣れない食物に蝕まれ、やがて病に仆れて働けなくなれば、はじめてこの森蔭に匍いて寄って休息を許されるのだ。瀕死の人影は、もはや風のように自由で——風のように瘦せ細っていた。……突然彼等の一人が四つん這いに起き上ると、河の方へ犬のように水を呑みに匍い出した。手ですくって、嘗めるように飲んでいたが、やがてカンカン日の照る中に、両脛を組み合わせて坐り直すと、しばらくしてあの縮れ毛の頭が、ガクリと胸許に垂れた。

これ等の苛酷、無秩序、無目的性を生むものは、この土地の白人たちの、現実に対する徹底した無関心である。マローは出張所の傍で次のような男に会う。

……ばったり一人の白人に出くわしたが、これはまたあまりにも垢ぬけした服装だ。僕ははじめなにか幻影ではないかとさえ思った。糊のきいた高いカラー、白いカフス、軽いアルパカの上衣、純白のズボン、垢一つつかないネクタイ、磨きあげた長靴、帽子は被っていない。油に光る頭髮を、櫛目もあざやかに分けて、白い大きな手に緑の裏を張ったパラソルをさしていた。とにかく驚いた男だった。そして耳の後にはペン軸を挟んでいる。彼は会計主任で、周囲の混乱には全く関係なく、帳簿を整然とつけることだけに専念している。部屋の隅で、熱病にやら

れた瀕死の病人が呻き声を立てると、彼はいやな顔をする。「どうもこの病人の呻き声を聞いていると、気になって仕事もなにもできやしませんよ。それでなくてさえ、この土地じゃ書き誤りのないようにするのが、実際大変なんですからね」というのが彼の言い分である。

マローがこの出張所を出張所を出発して徒歩で十五日目に着いた中央出張所でも、混乱と無計画だけが支配している。

……いわば出張所全体に、なにか陰謀じみた気配が充ち充ちていた。もっともそのために、実際なにか起るといふようなことは、もちろんないのだが。そもそここのもの一切——たとえば、事業の経営それ自体が、なにか博愛精神でも行われているかのような口実、それから彼等の口にする言葉、経営法、そしてちよつと見た彼等の仕事振り、等々——そうした一切がそうであるように、この陰謀気配もまた、結局は空しい影にすぎないのだ。ただ一つだけ真実な感情といえば、それは、なんとかして象牙が集り、手数料のとれるような交易地へやってもらいたいことだった。

この出張所の支配人は、部下の多くが熱病にかかった時、「こんな所へ来る人間が、内臓なんぞもってるのが贅沢だ」と言ったという。そしてこの出張所の倉庫が火事になった時

……火照の中を、人々は両手を振りかざし、狂気のようにかけまわっていた。と、突然、鬚を生やした頑丈な男が、バケツを掲げて、一散に河の方へ駆け下りて来た

かと思うと、——「みんなよくやってくれる。立派にやってくれる、」と怒鳴りながら、水を一ぱい飲んで、またしても駆け上って行った。だが、見ると、バケツの底には穴が開いているのだ。

穴の開いたバケツで水を汲む愚かさは、この出張所のやり口のすべてに通じるものである。彼らは要するに動いていればよいのであって、その効果に関する考慮は始めから持っていない。しかも、驚いたことに、彼らのやる事には一応の理窟はちゃんとついているのである。例えば、その使用している黒人に対する支払の方法は次の如くである。

黒奴どもは、毎週俸給として九インチばかりの長さの真鍮針金を三本ずつもらっていた。理窟の上では、どこでも河岸の村へ行つて、この針金を通貨にして、食糧を仕入れて来いということになっていた。だが、実際の運用と来た日にはどうだろう。全然村などというものがなかったり、あっても住民どもが敵意を持って応じなかったり、そうかと思えばかんじんの首頭かしらというのが、自分だけは僕等同様、饅頭類や、それにときどきは牡山羊の肉までもらつて食べるものだから、なんとかかかた難しい理由をつけては、船を止めたがらないのだった。だから、結局彼等は針金をそのまま嚙み下すか、でなければ環でも作つて釣り針でもこしらえるかしなければ、せつかくのこの素晴らしい俸給も、なんとも使用の途がないのだった。もっともきちんきちんと正確な支払い振りだけ

は、流石さすがは名代の貿易会社、天晴れ見事なものであったという次第。

## 二

今まで見て来たように、この小説を、アフリカに於ける白人たちの生態を暴露し、開拓事業への不信と批判をぶちまけた作品と見ることもできる。しかし、単にそれだけではない。その一つ奥に、更に人間的な問題が藏されている。それは、奥地出張所の主任のクルツ (Kurtz) という男をめづつての、マローの反応のし方である。クルツが奥地でかき集めて中央出張所へ送つてよこす象牙の量は、他の白人全部で集める象牙よりも多いという。マローにクルツの噂を聞かせた一等代理人は、「こいつはね、どうして大した奴なんだ、いわば隣れみと、学問と、進歩と、その他なんだが知らんが、そうしたものの使者なのだ」と言う。その後もマローは、折に触れてクルツという人物の噂を聞かされ、是非ともその男に会いたいと思うようになる。そして熱病にとりつかれて重態に陥っているというクルツを救うため様々な危険を冒してコンゴ河を溯つて行く。「彼と会つて語る……クルツと会つて話すことだけが僕の願ひであつたことがわかつてきた」

さて、マローがいよいよクルツのいる土人部落に近づき船上から双眼鏡で望んだ時、先ず視野に入つたのは、柵の杭の尖に突きさされた沢山の首であつた。

もしあの杭の尖端の首が、家の方を向かないでいたならば、さらにはるかに印象的な観物だったろうと思う。

つまり、こちを向いているのは、最初に僕が見た一つだけだったのだ。……真黒に乾からびて、脛は閉じたまま、肉はすっかり落ちつくしている、——まるで杭の天頂で静かに眠っているかのようにであり、乾からびて萎びた唇からは、真白な歯並さえ細く見えている。まるでそれは微笑——いや、あの永久の眠りに浮ぶ、渾しない、おどけた夢をでもたえず笑っているかのように見えた。『憐れみと、学問と、進歩の使者』だったはずのクルツの精神の、この荒廃ぶりはどうしたというのか。マローは次のように述べている。

言えることは、クルツという男が、いろいろ彼の欲望を充す上において、自制心というものを欠いていたこと、つまり、彼の中にはなにか足りないものがあつた、……荒野はすでに早くからそれを見抜いていた、そして彼の馬鹿げた侵入に対して、恐ろしい復讐を下していたのだった。思うに荒野は、彼自身も知らなかった彼、——そうだ、それは彼自身もこの大いなる荒野の孤独と言葉を交すまでは夢想さえしなかったものだが、——その彼に關して、いろいろと絶えず耳許に囁きつづけていたのだった、——しかもこの囁きは、たちまち彼の心を魅了してしまった。彼の胸の奥底が空虚だっただけに、それはなおさら彼のうちに声高く反響した。

クルツを「自制心」を欠いていたと評するマローが、自分の船で使っていた食人種たちには、その存在を認めているのは面白い。

それにしても、あれほど飢えの鬼に苛まれながら、なぜ彼等が僕等を襲って、——人数の点では三十人と五人なのだ——しこたま御馳走にありつかなかったものか、これは今考えてみても不思議でならない。……僕の見るところでは、なにか一種の自制力、それは僕等の臆測を、許さない不思議な人間性の一つだが、それがこの場合、働いていたものに相違ない。

クルツの生いたちを語って「いわばヨーロッパ全体が集まって彼を作り上げていたといつてよい」と述べたマローがクルツに欠けた徳目を人食い人種に認めたことは、文明に対する大きな皮肉であらう。

クルツは、「国際壺習防止協会」から頼まれて報告書を書いたことがあつた。その報告書は「実に雄弁……まるで一語一語が躍動しているような雄弁さだった」ところが最後の頁に脚註風のものが一つ、震える手で、つけ加えられていた。その部分はずっと後になって書き込んだものと思われた。

ありとあらゆる愛他的感情に切々と訴えて来た最後にまるでそれは稲妻が一閃、静かな大空をつんぎくにも似て、恐るべき閃光を投げかけていた。曰く、「よろしく彼等野獣を根絶せよ！」と。

ただ、象牙をかき集める欲望だけの鬼と化したクルツは、

自分の部下の持っている些細な象牙さえも奪わなければ気がすまない。銃を向けて射殺すると威嚇して取り上げてしまふ。

このような精神状態にあるクルツを見て、マローはどう感じたか。彼は言う。

とにかくクルツは平凡人ではなかった。野蛮未熟な魂を、あるいは魅了し、あるいは威嚇して、彼を讃える危険な魔女の踊りに引込むだけの異様な魅力は具えていたし、またあの「巡礼」たちの卑小な魂を激しい不安に駆り立てることもできた。……そうだ、僕は決して彼を忘れることができない。

クルツが病み衰えて死ぬ前に、「地獄だ！ 地獄だ！」  
（“The horror! The horror!”）と叫んだことに関しては、

……省みて僕などは、おそらくなにも言うべきことすらないのではないかと思うと恥しかった。だからこそ、僕はクルツを非凡だというのだ。彼には言うべきことがあった。そしてそれを言ったのだ。……一切を要約し、

——そして判決を下した、「地獄だ！」と。驚くべき人間だった。これもまた一種の信念の告白だったからだ。

とにかく卒直さがあり、確信があった。……彼は、最後に大きく一步踏み出して、死の断崖を越えてしまったのにひきかえ、僕はオドオドと尻り込む足を引きずって、またしても元の道に戻って来たにすぎないのだ。

マローがクルツに認めて讃歎したのは、地獄までも堕ち

て行ったその烈しさなのである。前に見た、他の白人たちの無感動、無頓着さ、卑小さ、微温的な生き方等の記述は、実はクルツの強烈な生き方を浮き立たせる効果を持っていたのである。作者はこの小説で、単に、開拓会社の実態を示しただけではなかったのだ。「闇の奥」という題名は、アフリカ奥地を指すと共に、またクルツの心の状態をも指し示しているのだ。マローは言う。

もちろん人間の中には、道を踏み外すことさえできないほどの馬鹿もいれば、——闇の力の強さを意識することさえしない鈍感者流もいる。僕は思うに、馬鹿が悪魔に魂を売った例はないのだ。どちらだかは知らないが、——馬鹿が馬鹿すぎるか、悪魔が悪魔すぎるか、そのどちらかなのだ。

クルツの烈しさを讃歎したマローも、しかし、全面的に彼に感心したわけではない。それは前に見た「彼の胸の奥底は空虚だった……」というマローの評言からも知られる。

マローはクルツを批判しつつ牽かれていた。 ambivalence の心理であろう。だから、マローはクルツの死後の評価について心配する部下に対して答えた自分の言葉についても次のように言う。

「クルツの評判のことなら、僕に任しておいて大丈夫だよ」とも言っていたが、僕自身にも、それがどこまで真実の言葉だかは、よくわからなかった。

クルツを讃歎しつつも、反撥するマローは、クルツの言

動を盲目的に崇拜しているロシア人の青年にも同感すること  
ができない。

……なにも僕は、クルツに対する彼の献身が羨しいと  
いうのではない。彼としては、そんなことなど考えても  
いないのだ。それは、いわばおのずから彼に来て、彼は  
ただそれを宿命のような熱意をもって受け容れているに  
すぎない、僕はむしろこう言いたい、このことこそ、彼  
にとつて、おそらく彼が遭遇したあらゆる意味でもっと  
も恐ろしい危険だったのではなからうかと。

さて、アフリカでの仕事を切り上げてパリへ帰ったマーロ  
ーは、なかなかクルツの悪夢から脱け出すことができない。  
街を行き交う人間の群を見ても、クルツの世界こそ現実で、  
彼らは夢の世界の住人なのだと感じる。

……街を気忙しげに右往左往しながら、互いに零細な  
金をくすね合い、忌むしい料理を喰い、有害なビールを  
あふつては、くだらない愚かな夢を見ている群衆に対し  
て、たまらない嫌悪を感じていた。彼等は徒らに僕の思  
索を攪き乱すばかりであり、いわば余計な闖入者でしか  
なかった。僕の知っているあの世界を、彼等は少しも知  
らないのだ。してみれば彼等の人生知識などというもの  
は、僕にとつてはただ腹立たしい虚偽にしかすぎない。  
なんの反省もなく生活の安全さを確信して、ただ日々  
の仕事に忙殺されているにすぎない彼等衆愚の生活態度  
は、いわばただわからないばかりに、危険を前にして、

得々として愚行を演じている男のように、僕にとつては  
堪らないものだった。

その中、かつてクルツと同僚だったという新聞記者がマー  
ローを訪ねて来て、クルツに関して次のように言う。

「……つまり信念があった——そうでしょう？——信  
念ですよ。なんでも本当に信じていることができた——ええ  
なんでもですよ。急進党のリーダーにでもなれば大した  
ものだったろうになあ」

そして「何党の？」と尋ねたマーローには、「いや、何党  
だっていいですがね……とにかく奴は過激派でしたからね」  
と答える。この問答は、クルツのような人間を理解する一つ  
の鍵を提供するものであろう。「信念」といつてもその底に  
は何もないのだ。「何党」でもいいのである。前にマーロー  
が評したように「胸の奥底は空虚」だったのである。そして  
その空虚を、ただ激しい意欲だけが被っている。こういう人  
間が民衆を率いた場合の危険性は、前の大戦でわれわれが十  
分経験した所である。

### 三

この小説の末尾で、愛人の最期いまわの際の言葉を聞かせて欲し  
いと頼むクルツの許婚に、マーローは何故「地獄だ！ 地獄  
だ！」という叫びをありのままに告げず、

「あの男の最期の言葉といえますのはね——やはりお  
嬢さんのお名前でした」

と嘘をついて彼女を喜ばせるのであろう。それは女性に対するマローの侮蔑であるとも考えられる。彼はアフリカでの仕事を世話してくれた伯母について次のように言っている。

それにしても女というものが、一切真実を見ようとし  
ないのも、妙なものだ。つまり、みんなめいめい自分勝  
手な世界に住んでいるのだが、そんな世界なんてものは  
ついぞ一度だってなかったし、またあるわけのものでも  
ないのだよ。あまりにも美しすぎるのだ。

また、次のようにも言っている。

奴等——むろん女のことだよ——奴等など、なんの関  
係があるものか——あつてはならないのだ。女なんても  
のは、奴等だけの美しい世界の中に閉じこもらせておけ  
ばいいのだ、でなければ、僕等男の世界が悪くなる。

女性に、クルツの心の凄絶な苦悶を知らせることなど勿体な  
いとマローは考えたのかも知れない。女性は真実を知るに  
価いしないのだ。「……きつとなにかは残るにちがいがござい  
ませんわ。少くともあの方の言葉は、ちゃんと生きて残って  
いますものねえ」と信じ込んでいる娘には、そのまま信じ込  
ませて置くことが、マローの、いたわりの仮面を被った最  
大の侮辱であろう。（作者コンラドの女性観については、ト  
マス・モーザー (Thomas Moser) の論攷に詳しいが、彼も  
大体マローと似た考えを持っていたようである。）(三)

更にまた、クルツの叫びを告げなかったマローの心には  
大自然の偉大さに接した後の、些末な人事への無関心があつ

たかも知れない。クルツが何と叫ぼうと結局問題ではないの  
であつた。マローは言っている。

……なんという茶番だ、人生という奴は、——空しい目  
的のために、血も涙もない冷酷な論理を、ただ神秘めか  
して整えたというにすぎない——。

また、アフリカの自然については、

一步外へ出れば、開かれたこの猫の額ほどの土地を囲  
んで、あるものはただ茫漠たる荒蕪の沈黙だけだ。それ  
は、まるで罪業か真理の深さにも似た、圧倒するような  
大ききをもつて、この滑稽な人間どもの侵入の、いつか  
は跡形もなく拭い去られるのを、じつと我慢強く待つて  
いるかのように見えた。

と述べている。そして、クルツの最期の言葉について、その  
許婚に嘘偽を伝えた時マローは、

僕は今にも家が崩れ落ち、大空が頭上に落ちかかるの  
ではないかと思つた。だが、なに一つ起らなかった。こ  
れしきのことで天は落ちないのだ。

と言っている。マローにとつて、クルツは驚くべき存在で  
あつた。しかし自然はクルツよりも更に更に大きな存在であ  
つた。クルツの秘めていた闇も、自然の闇の分身としてのみ  
意味があつたのだ。マローは、はっきり言っている、「本  
当は、僕は荒野に魅せられて来たのであり、クルツに惹かれ  
て来たのではない」と。クルツという名前がドイツ語の

“kurz” (短かい)に通じることはこの関連において意味が



ある。なお、クルツの原型となった実在の人物は「小さい」を意味する Klein という名前だったということである。(四)

〔註〕

- (一) The Introduction by Richard Curle to the *Congo Diary*  
(Dent's Collected Edition)
  - (二) Douglas Hewitt : *Conrad*, p.18
  - (三) Thomas Moser : *Joseph Conrad, Achievement and Decline*
  - (四) Gérard Jean-Aubry : *The Sea Dreamer*, p. 170
- (訳文は中野好夫氏のを借用させていただいた)